

「悔い改めない町々」

2015年07月27日

ルカによる福音書 10章 13節～16節。「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところでなされた奇跡がティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない。しかし、裁きの時には、お前たちよりまだティルスやシドンの方が軽い罰で済む。また、カファルナウム、お前は、／天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである。」

主イエスは 72 人を任命し、2 人 1 組にして「神の国」の宣教に遣わされた。その際の心構えと諸注意を語られた。上記の記述は、その続きである。ここでは、宣教を拒まれた場合に、遣わされた者たちへの励ましを語ったものと思われる。

イスラエル人は自分たちの民族は神に選ばれ、アブラハムを父とする特別に祝福された民族であるという強い自負と高い誇りを持っていた。この自負と誇りは逆に、他民族は神を知らない野蛮で、汚れた民族であると見なし、軽蔑していた。

コラジン、ベトサイダ、カファルナウムは皆、ガリラヤ湖畔にある町々である。主イエスはこれらの町々で、御言葉を語り、いやしと悪霊追放の宣教をされた。ところが、神を初々しく信じる悔い改めの信仰は起こらなかった。もし、イスラエル人が軽蔑する異教のシドンやティルスで、主イエスの言葉と業（奇跡）を見たならば、異教の人々は粗布をまとい、灰の中に座して悔い改めたに違いない。裁きの日には、信仰を誇るイスラエルのコラジン、ベトサイダ、カファルナウムより、イスラエル人が汚れた民族としている異教のシドンやティルスの方が軽い罰で済む。主イエスは、「カファルナウム、お前は、／天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ」と激しい言葉で断罪された。カファルナウムはペトロの故郷である。神の民であることを誇るカファルナウムは天まで上げられる祝福をいただけるか。否、陰府にまで落とされる。信仰には既得権などはない。今、ここで、心を開いて神を受け入れ、この方に従うことである。

主イエスは、「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである」と語られた。この言葉を遣わす者たちに伝えたかったのであろう。宣教に派遣されるお前たちの言葉に耳を傾ける者は、主イエスに聞く者である。お前たちの言葉に耳を貸さない者は主イエスを拒む者である。主イエスを拒む者は、主イエスを天から遣わした神を拒むのである。

ガリラヤの民衆はあらゆる面で飢え渴き、欠乏していた。彼らは自分の生活を守ることに必死で、他人のことなど考える余裕はない。その状況では、神の恵みを分かち、愛し合って共に生きよ、などという宣教には耳を貸さない。宣教が拒絶されることは当然で、遣わされた者たちは深い挫折を味わうだろう。主イエスは、あなた方に聞く者は主イエスに聞く者で、主イエスに聞く者は神に受け入れられるのだと言われた。この言葉を聞いて、遣わされた者たちは、どれほど勇気を与えられたであろうか。

この言葉はキリスト教の核心である。私たちが主イエスから遣わされた友から聞いて、主イエスの御言葉を受け入れた。御言葉を受け入れた者は神の者となるのである。